

## タクシー（ベトナム歩道 第9回）

著者	寺本 実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	243
ページ	52-52
発行年	2015-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00039680">http://doi.org/10.20561/00039680</a>

連載 ベトナム歩道

ベトナムの都市部ではさまざまな色合いのタクシーが街に彩りを添えている。暮らしのなかでタクシーを利用することもよくある。料金的には市バスより高く、運転手によって対応、移動中の雰囲気は異なるが、自身が選択した場所から目的地に向かうことができ、比較的交通上の安全性が高いという利点がある。また、長期間現地で暮らしていると、タクシー会社ごとの傾向が掴めるようになる。少し料金は高めだが、走り接客が安定している会社、強気の走りをする会社、車内の清潔さが保たれている会社、少しリスクを覚悟しなくてはいけない会社など、会社名と車体を見るだけで乗車後の状況が大体想像つくようになった。

海外赴任で二〇一三年三月から一年間は北部のハノイ、二〇一四年三月から一年間は南部のホーチミン市に滞在したが、北部と南部では肌で感じるタクシー事情に違いがあった。

ハノイに滞在中は通勤で市バスを利用する機会が多かったが、用途に応じてタクシーを用いた。乗車したタクシー会社は、タクシーグループ、マイリン、エービーシー、ザウヒー、タインガー、モーニング、タインコン、バーサオ、ソンホン、フンヴォン、ヴィアイシー、サオハノイ、ミーディン、フードン……と尽きない。筆者の滞在時にハノイ市のタクシーで中心的な存在だったのは、タクシーグループとマイリンであった。白基調で車体を貫く赤のライン、ブルーのロゴが印象的なタクシーグループは、ベトナム北部、主にハノイを中心に活動し、リー朝によるホアルーからハノイ（当時はタンロンと呼称）への遷都から二〇〇〇年となる二〇一〇年に、一九九三年創業のハノイタクシーを含む六社が参加して形成された。同社は全車両が

トヨタの車であることをウェブサイトで謳っている。他方、鮮やかな緑色を使用した車体で有名なマイリンは一九九三年にホーチミン市で産声を上げた。当初二〇台であった車両数は二〇一三年五月段階で一万台を超え、五四／六三中央直轄市・省に経営を拡大している。

ハノイを走るタクシーの特徴は、小型車が多いことだった。道幅が狭いことも要因のひとつなのだろう。小型であれば初乗り料金も安く、小回りが利く。また、ハノイでは運転手がよく話してくれた。互いの家族、仕事など、話が広がっていくことがよくあった。

今ではありえないが、ハノイでタクシーという思い出す出来事がある。二〇〇二年に成田ーハノイ間の直行便が就航する前のこと。香港経由でハノイ入りすると、到着は夜近く。入国審査も今よりゆっくりだった。その日は手荷物受け取り所で荷物をピックアップするのに時間がかかり、空港の外に出ると、いつものタクシーが出払っていた。周囲のベトナム人が筆者を一定方向に進めようとしているように感じたが、当時は流れに逆らう知恵もなく、白タクと知らないまま白色の乗用車に乗った。空港を出、薄暗いスタンドで給油をして車は市内に向けて走り出した。しばらくすると、闇の中で突然ボンネットが開いた。運転手が車を止めて閉めに行く。再びスタート。だが、少し進むとまたボンネットが開いた……。内心筆者は穏やかでなかった。予定した宿泊先に辿り着いた時には安堵した。請求料金は一七ドル。あの日、あの車で運転手は家に辿り着けたのだろうか。

南部のホーチミン市では、タクシーの主流は七〜八人乗りの大型車と中型車であった。先に紹介したマイリンとヴィナスンが中心で、特に

後者が優勢であった。車両数二七台で二〇〇三年にホーチミン市に登場したヴィナスンは、ピンズオン、ドンナイ、バリアブントウ、ダナン、カインホアと主に南部を中心に活動域を広げ、今や車両数は五八〇〇台を超えた。白を基調とし、深緑と赤色を車両下部に配した同社の車体デザインは落ち着いた印象を与える。その他にサイゴンツーリストなどがあったが、ハノイのタクシー百花繚乱ぶりと比べると会社数は少なかった。運転手の対応にも違いがあり、ハノイ市の運転手ほどにホーチミン市の運転手は話さない傾向があった。

二〇一四年七月のこと。ホーチミン市で空港からの夜の移動の際に少し新たな経験をした。妻子が夏休みのために深夜便で一時帰国するのを空港で見送った後の帰り道。タクシー待ちの旅行者が多く、翌日の仕事のことを気にかかり、待つのを避けて見知らぬタクシーを利用した。乗車すると、暑さの続くホーチミン市でクーラーをつけていない。ムツとした熱気が体を覆った。車が動き出して運転手に話しかけても返事をしようとしれない。携帯電話をいじりだし、何やらメールでやりとりを始め、片手運転を続けた。日頃我慢をすることが多い筆者だが、この時は車を止めるように運転手に繰り返し伝えて下車した。ベトナムは比較的安全で、治安はいい方だと思っ。しかし、日本での暮らしと同様に油断をすると、さまざまなことがある。

タクシーも結局は人である。しかし、乗車前に運転手の人柄までは分からない。しかるべき場所で素性の確かなタクシーに乗車することを心がけたい。

(つらもと みる／アジア経済研究所 前在ベトナム海外研究員)